

中学校美術科における包括的図像解釈の視点を通じた鑑賞教育の 実践研究

浅野 瑞樹
教科領域コース

1. はじめに

本報告書では、美術史的な視点に立った、中学校美術科における鑑賞教育の実践と、自身の美術史研究について述べたい。『中学校学習指導要領解説 美術編』において、鑑賞は、「自分の見方や感じ方を大切にして、造形的なよさや美しさなどを感じ取り、表現の意図と工夫、美術の働きや美術文化などについて考えるなどして、見方や感じ方を深めるなどの鑑賞に関する資質・能力を育成する領域」として位置づけられているが、筆者はその中の「自分の見方や感じ方」及び「美術文化などについて考える」の部分に着目した。特に美術作品の鑑賞の授業において、生徒が「自分の見方や感じ方」に基づかない「正解」を教師に求めてくる可能性や、教師の反応や振る舞いが意図せず「正解」を示してしまう可能性は否めない。また、インターネットを介して簡単に専門家の作品解釈を知ることができる現代においては、生徒たちはたちまち「自分が感じたこと」と「専門家の作品解釈」の間の乖離を発見して、自分で意見を持つことに価値を感じなくなってしまうかもしれない。そこで、生徒が自信をもって「主観」を大切にして鑑賞活動を行うための手立てを、美術史の視点から考察した。

2. 包括的図像解釈と鑑賞教育

研究に際して私は、「包括的図像解釈」の手法を用いて（あるいはその視点に立って）研究を進めた。「包括的図像解釈」とは、フィレンツェ大学文哲学部教授のカルロ・デル・ブラーヴォが自身の美術史研究に際して独自に展開した方法論である。甲斐（2018）によれば、彼は図像解釈の適用範囲を、個々の作品を超えて、芸術家の作品全体にまで拡張し、これらの作品群が総体として織りなす倫理的思想圏の再構築をめざした。彼は、個々の芸術家を、パトロン在意図の無批判な遂行者としてではなく、尊厳をもった人格として人文主義的に捉え、作品個々の様式、主題選択に芸術家自身の倫理的選択を見出した。この「包括的図像解釈」は、「作者の表現などの特徴から帰納法的にその作者の思想信条を推測し、その前提に立って演繹法的に作者の一群の作品を解釈する」という経過をたどるが、ここで重要なのが、作品群の解釈の前提となる作者の思想信条を、研究者自身が作品そのものやその他の資料などに照らし合わせて推測しているという点である。美術評論においても、作品の表面に現れたテキストのみに着目し、作家などの作品の背景を全く顧みない、「主体の抹消」とでもいふべき批評もあるが、この研究態度はそれとは真逆である。この「主観的」ともいえる研究態度は、本研究の課題である、「主観を大切にした鑑賞活動」を考える上で鍵となると考えた。

3. 研究の経過

院1年次には、茨城大学教育学部附属中学校（以下附属中）3年生を対象に、作品解釈を、文化的背景を理解した上で行う鑑賞の授業の実践を行った。院2年次には、前年度の結果を受けて改めて、水戸市立見川中学校（以下見川中）1年生を対象に、授業実践を行った。その後、この時扱った作家について包括的図像解釈の手法を用いて作家研究を行った。

4. 授業実践

（1）附属中での実践

I. 概要

対象は3年生である。この実践では、授業内で包括的図像解釈のアプローチの一部を授業内の活動に落とし込めないかを検討した。

II. 方法

実践に際して、作品1点（イワン・シーシキン《正午、モスクワ郊外》（1869年、油彩、キャンバス、トレチャコフ美術館）を選定し、作品に描かれた対象にまつわる文化的背景について記した3種類の資料（図）と共に提示した。生徒はまず作品を鑑賞し、どのようなモチーフが描かれているかを確認する。次に資料を読みながらワークシートの問いに回答することで、作品に隠された文化的背景についての観点を得る。その後改めて作品を鑑賞することで、深い理解のもと作品を鑑賞することを目的とした。

III. 結果

反省点は、以下の通りである。

- ・鑑賞の時間が少なく、特に最後の鑑賞はほとんど時間を取れなかった。
- ・資料の読解が生徒にとってはやや難しかった。
- ・資料そのものの構成が知識的な側面に偏りすぎていた。
- ・以上のために、鑑賞活動よりも資料を読む活動になってしまったように感じる。
- ・作品の提示の仕方にも問題があり、手元で見られるよう生徒の端末に画像データを配布したが、周知が遅れた。

本実践では、手段が目標と化して、鑑賞活動の構成以上に、資料の準備に主眼を置いてしまっていたことに問題があった。結果として、実際には絵画の鑑賞活動よりも、資料を読む活動になってしまい、絵画の鑑賞活動としては不十分なものとなってしまった。

（2）見川中での実践

I. 概要

対象は1年生である。前年の反省を受け、授業内に包括的図像解釈のプロセスを取り入れるのではなく、作家性の一部に着目して、それを出発点に鑑賞を行う形で授業を行った。

II. 方法

授業では1年生の生徒を対象に、19世紀ロシアの画家・I.レーピンの絵画作品《なんという広がりだ！》（1903年、油彩、キャンバス、国立ロシア美術館蔵）の鑑賞活動を行った。彼は、人物描写に極めて優れた画家である。授業内では、水の流れや人物の動作などの描写などに見られ

る「動き」の表現に着目し、「もし作品が動いたらどのように動くか想像しよう」という課題設定を行うことで、こうした表現に着目しながら、想像力を働かせて鑑賞活動に取り組めるようにした。

授業実践に際しては、作品を電子黒板及び生徒の個人用端末で鑑賞できるように準備し、作品主題を段階的に想像できるように構成したワークシートと共に提示した。生徒はまず作品にどのようなモチーフが描かれているか鑑賞し、発見したことをワークシートに記入する(①)。また、生徒間で意見を交流させ、多様な見方を取り入れてさらに鑑賞活動を深められるようにする(②)。続いて、発見したことをもとに動きの描写に着目しながら、どのような場面か、どのような音が聞こえてきそうか、作品に描かれている場面やその前後で何が起きているのか、といった「具体的な場面設定」を想像する(③)。その後、それらを漫画表現におけるセリフの吹き出しやオノマトペのように、ワークシートに印刷した作品画像に書き込み、生徒それぞれが鑑賞し、想像した「動き」のイメージを視覚化する(④)。

III. 結果

授業を通して生徒たちは、①：鑑賞で得た客観的事実(ただし、描かれたものが何であるかという解釈も、生徒の捉え方によって異なる。)②：意見交流によって得た、他者の見方・考え方③：①②を基に想像した主観的イメージ④：それを視覚的に表現する過程でより具体的になったり、新たに生まれたりするイメージ(③の段階のワークシートの枠の記述にはない表現が、④の段階で見られた。)といった順に、作品から得られた情報を出発点にイメージを深化させられたものとする。振り返りの記述からも、「最初は絵の場面が草原だと思っていたけれど、全体を良く見わたすことで、海に見えてきた」といったように、生徒の中で、イメージが変容していった様子が見て取れた。また、「絵のつくりや、絵の中の人物などに注目して見ると絵の中のようすや、人物やそれを描いた人の思いや感情を想像できた」との記述も見られ、作品の全体と細部に着目しながら想像を膨らますことができたものと思われる。

5. 包括的図像解釈的手法を用いた美術史研究の実践

包括的図像解釈の手法を用いて、見川中の実践で取り上げた作品の作者である、19世紀ロシアの画家、イリヤ・レーピン(1844-1930)の研究を行った。詳細は報告書本文に譲るが、研究に際してはまず、彼が生涯制作した複数の絵画の大部分を鑑賞し、その作品が肖像画、風俗画、歴史画、革命運動を主題にした作品等多岐にわたり、多様性に富んでいることを確認した。しかし、「多様であること」は単に作品群の中に複数の作品主題が内包されることを意味するのみで、これだけで作家・作品評価を片づけるわけにはいかない。さらに彼の作品を鑑賞し、先行研究やレーピン自身の手記を読む中で、作品群に通底する価値観として、「人間・生命そのものへの愛情」を見出せるのではないかということに気づいた。研究ではそうした視点に基づいて、《思いがけなく》(1581年11月16日のイワン雷帝とその息子イワン)などの作品を解釈した。また、晩年に作家レフ・トルストイとの交友があったことに着目し、一部の作品について、彼の思想に基づいて解釈した。

6. 実践の考察

包括的図像解釈のアプローチ手法は、作品群の全体像を捉え、時には膨大な資料を読み解きなが

ら作家像を捉え、それを基に個々の作品を解釈するものであり、膨大な時間を要する。当然ながら、この手法そのものを授業に取り入れることはできないため、手法の一部を適切な形で抽出する必要がある。

1年次の研究は、結局資料の読解に終始してしまっし、そもそも筆者の視点からの解釈が資料の選定に多分に影響しており、ある意味で結論ありきの鑑賞活動になってしまったといえる。すなわち、アプローチ全体の一部を中途半端に抽出して、研究課程の再現をしたのでは、有効な鑑賞方法たり得ない。考え得る改善策としては、長期間にわたる活動に位置づけた上で、様々な研究者の視点を反映したり、それを示す資料を提示したりすることである。

もう一つの方法論として、包括的図像解釈の視点から作品を捉えて見えたものを、その作品の「核」として捉え、「ポイント」として生徒に提示することである。この方法では生徒が実際に美術史研究の過程を辿ることはないが、「ポイント」を入りに自由に鑑賞活動を展開していく。2年次前期の実践では、レーピンの人間表現の巧みさから、「登場人物の物語性」に着目した。その上でさらに具体的に「動き」というキーワードを設定し、「動きに着目してドラマを想像しよう」という問いかけのもと、鑑賞活動を行った。このような手法では、包括的図像解釈で捉えた作家像はあくまで鑑賞活動の入り口に過ぎない。しかし、教員が教材研究の一環として、こうしたアプローチをとって作品に迫るとき、独自の作品解釈を持って、それを基に授業設計をすることができる。教員が作家理解に基づいた、必ずしも従来の見方に囚われない独自の作品解釈を持つことで、授業の入り口はより広まり、その後の授業展開や、生徒の思考の余地も格段に大きくなるはずである。

今回の実践では、2年次後期の作家研究を次なる実践へとつなげることは叶わなかった。今後の授業実践の中での課題としたい。

参考・引用文献

- (1) 井筒俊彦『ロシア的人間』, 中公文庫, 1989年, pp. 226-264.
- (2) ヴォルコフ, ソロモン『20世紀ロシア文化全史 政治と芸術の十字路で』(2008年), 今村朗訳, 河出書房新社, 2019年, pp. 17, 111.
- (3) ゴートフ, A. I.『ロシア美術史』(1971年), 石黒寛・濱田靖子訳, 美術出版社, 1986年, p. 336.
- (4) デル・ブラーヴォ, カルロ『ミケランジェロ研究』, 甲斐教行訳, 中央公論美術出版, 2018年, pp. i~iv.
- (5) 沼野充義, 望月哲男, 池田嘉朗『ロシア文化辞典』, 丸善出版, 2019年, p. 389.
- (6) 靱山昌夫『レーピンとロシア近代絵画の煌めき』, 東京美術, 2018年, pp. 14-19, 114.
- (7) レーピン, イリヤ『ヴォルガの船曳』(1888~1916年), 中公文庫, 1991年.
- (8) 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 美術編, 日本文教出版, 2018年, pp. 28-29.
- (9) 『国立トレチャコフ美術館所蔵 イリヤ・レーピン展』, ガリーナ・チュラク, 靱山昌夫監修, Bunkamura ザ・ミュージアム他, 2012年.
- (10) Ilija Repin Suuri taiteilja, suuri ihminen, Helsingin Sanomain Viikkoliite, 23.12.1928, pp. 4, 8, digi.kansalliskirjasto.fi/23.12.1928/Helsingin_Sanomat_no_350_-_Digitaaliset_aineistot_-_Kansalliskirjasto (最終閲覧2026年2月2日).